INTERNATIONAL EXCHANGE PROGRAM COMMITTEE

KUMAMOTO UNIVERSITY OF COMMERCE
KUMAMOTO JUNIOR COLLEGE

# 国際交流レター 第12・13合併号

新教室棟　11号館

## CONTENTS

変わらぬ開放的雰囲気……2
更なる交流に向けて……3
韓国との親睦更に深まる……4
89名の教職員が大田大学校訪問……5
第４回モンタナ研修団24名訪米……6
大田大学校教職員研修団来学……8
第４回大田大学校学生研修団来学……8
甲南イリノイ学生研修団来学……9
交換教授姉妹校滞在印象記……10
スポット……14
第２回長期交換留学生報告記……15
〈特集〉アンケート『国際交流を考える』…20
ＳＥＭＩＮＡＲＳ……24
海外ゼミ研修……27
1990年度留学生名簿……28
1990年国際交流ＥＶＥＮＴＳ……30

1991.2.1　熊本商科大学・熊本短期大学国際交流委員会

# 変わらぬ開放的雰囲気
## ——深圳大学——

### 深圳大学訪問記

熊本商科大学助教授　西　紀昭

3月25日から28日まで、園田富雄短大学長を団長とする本学園の一行四名が、姉妹大学である中国の深圳大学を訪問した。メンバーは園田団長の他に、永末嘉孝国際交流委員長、西紀昭助教授、田中和穂総務課長補佐の計四名である。

（深圳大学にて）

昨年の「天安門事件」後、深圳大学では学長が交替され、新たに魏佑海学長が着任された。今回の訪問は魏学長の懇ろな招待を受けて実現したものである。訪問の第一の目的は、魏学長のもとで両大学間の友好交流を一層発展させるよう、確認し合うことであった。又、二番目はこれまで続けてきた留学生の交換の面で生じてきた困難な問題について、双方で協議し解決をはかることであった。

25日香港に一泊して、26日昼前深圳駅に着く。本学に来られたことのある兪仲文先生、本学から帰国されたばかりの王暁敏先生、外事弁公室の侯梅芳副主任の出迎えを受け、深圳大学に向かう。宿舎の前には應副学長、張野外事弁公室主任らが出迎えておられた。午後二時から魏学長との会談が始まる。深圳大学側は魏学長はじめ、應副学長・鄭副学長・黄副学長、高等専科学院の廖院長、国際文化学部の胡学部長、特区経済研究所の陳副所長、教務処の陳副処長、張外事弁公室主任、党委副書記の兪先生と通訳の侯副主任といった顔ぶれで、いわば深圳大学のオールスターキャストで会談に臨んでいただいた。深圳大学の本学園に対する熱烈な友情がこの顔ぶれからうかがえると思う。

魏学長は訪米経験のある知識人で、専門は航空工学とのことである。園田学長とは終始英語で会談を続けられ、ウィットに富んだ会話が交わされた。園田学長からは深圳大学との絆を一層強固にしたいとの希望が述べられ、魏学長からも両大学間の交流を更に発展させたいとの希望が述べられた。又、魏学長からは、深圳大学は日本の海部首相とは親しい関係にあり、先日首相の代理で図書の寄贈に来られた中島前文相に「深圳大学が最初に友好関係を結んだのは、熊本商科大学と短期大学です。」と貴学の宣伝をしておきました、という話も披露された。会談終了後、園田学長は魏学長の案内で学内を参観され、その間に、永末・西の二名で應副学長始め教務関係の先生方と問題点の協議を行った。深圳大学からの留学生の受け入れを二月に変更すること、本学から派遣する留学生が専門の単位を修得し易くすること等総て心良く了承していただき、今後も学生の利益を最優先で考えますとの言葉もいただいた。

夜の歓迎夕食会には、党委書記の呉沢偉先生も見えられ、細やかな心遣いをいただいた。総じて、本学園に対する熱い友情を感じ続けた訪問であった。そして又、深圳大学が今まで通り、中国の改革・開放の先頭を走り続ける大学であることを感じさせた訪問であった。

（1990年5月執筆）

# 更なる交流に向けて
## ――米国・モンタナ州三大学――

### モンタナ三姉妹大学訪問記

国際交流委員長　永末　嘉孝

わが青春時代の憧れの的、ゲイリー・クーパーの故郷を今夏はからずも訪問した。

岩野茂道商大学長夫妻のモンタナ三姉妹大学友好訪問（7月28日～8月8日）に同行させていただいたのである。

中国以外は“井蛙”に等しく、英語力も高校生以下では、学長夫妻や喜佐田さん（通訳）の足手まといでしかあるまいと（事実そうであったが）躊躇したが、この機会を逃してはと厚かましくも同行させてもらった。

しかし、アメリカ人とは、なんと器の大きい人間なんだろう。モンタナの大自然がすばらしい人格を形成するのであろうか。

ＭＳＵのドン・クラーク先生、キャロル大のシャーリー・ベーカー女史、ＵＭのピーター・カーン先生ほか、関係者すべての笑顔は今も私の心を和ませてくれる。

とりわけ、ドン・クラーク先生は「国際政治学」の学者で、著書も数冊あると聞くが、その身についたユーモア、豪放磊落でいて細やかな気配り、私はすっかり魅了されてしまった。

さて、われわれ訪問団は姉妹校関係を更に深めるために次の事項について検討することを約した。列記して全学のご支援とご協力をお願いする。

ＭＳＵ（モンタナ州立大学）

１．学生交換

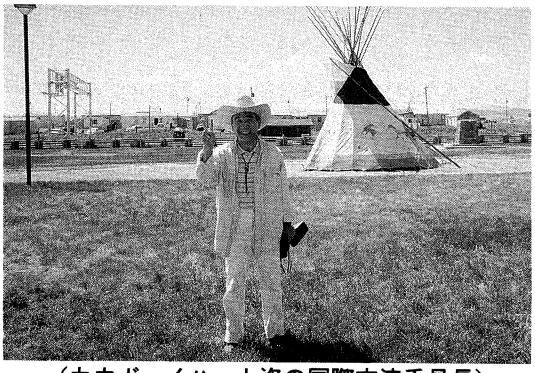
①短期交換を現在の２名から増員する。

②長期交換を現在の１名から３名に増員する。費用も授業料だけでなく、宿舎食費共受け入れ側で負担する。

③サマープログラム（隔年）は国際経済学科生の夏期研修と重なっても実施する。

２．職員交換

①職員の交換又は一方的派遣をする。



（カウボーイハット姿の国際交流委員長）

キャロル大学

１．学生交換

①短期交換は従来通り毎年２名交換

②長期交換を新たに１～２名交換

２．教員交換

①隔年で１年間又は半年間交換

ＵＭ（モンタナ大学）

１．四大学間交流に対する日米友好基金からの助成金は３年間で打ち切られるが交流プログラムは継続する。

尚、国際経済学科生の夏期研修（’92年度から）については三大学とも各50名程度受け入れを承諾した。　（1990年11月執筆）

# 韓国との親睦更に深まる

## 韓国を訪問して

熊本商科大学経済同友会
代表幹事　竹永　秀幸

熊本商大経済同友会の創立10周年記念行事の一環として、熊本商大・熊本短大の姉妹校であります韓国の大田大学校を表敬訪問いたしました。私達は学校の国際交流室を通じ、去る4月14日から16日迄の2泊3日間の慌ただしい日程ではありましたが、本当に楽しい韓国旅行をすることができました。特に大田大学校の呉総長先生を初め、呉理事長先生、そして多くの先生方の心暖まる歓迎と心遣いに大変恐縮した次第でございます。

(大田大学校親善訪問団一行)

韓国では、ソウルから約170km程離れた大田市の大田大学校に高速道路を使ってバスで向かいましたが、ソウル市内の混雑は想像以上のものがあり、大学到着が約2時間ぐらい遅れてしまいました。この様に韓国は活気に満ち溢れており、凄まじい経済発展をとげております。特に韓国の総人口4300万人の内、約30%の1200万人がソウルに集中しており都市化現象は日本以上の感じが致します。その為ソウルの市内の車の渋滞は特に酷く、気の短い日本人には大変つらいものだと思いました。

韓国民の中でも、若年層の人々は特に明るい雰囲気につつまれていると思います。丁度ソウルの景福宮を見学している時に女子高校生のピクニックと一緒になりましたところ、私達が日本人とわかると「こんにちは」「さようなら」と呼び掛けられ一緒に写真を撮ったりしましたが、日本人に対する親日感はすばらしいものがありました。しかしガイドの説明にもありましたが、大人の人達に対しては言葉遣いに充分注意して欲しい等、まだまだ違和感が残っている様です。

ショッピングでは特にコピー商品がたくさん販売されているのには驚きました。ダンヒル、シャネル、オメガ、ローレックス等々、本物そっくりの物が売られているのです。どうして偽物にブランド名をつけて堂々と販売できるのか、私には理解できませんでした。

今後、最も近い外国として多くのチャンスを作りながら経済ベースでの親密度が高くなる様に努力していきたいものだと思います。

最後に、今回の旅行に対し学校側から、園田学長ご夫妻、田島先生、高瀬先生、目黒次長にご参加いただき、又志文会から小堀会長にもご多忙中のところご参加いただき、本当に楽しい旅と共に非常にレベルの高いツアーが組めましたことを心から厚く御礼申し上げます。　(1990年5月執筆)

# 89名の教職員が大田大学校訪問

親和会幹事長　大塚　信生

恒例の親和会旅行は、１泊２日の国内旅行から、今年はじめての海外旅行として、８月６・７・８日の２泊３日間韓国旅行を行った。

いつもの事ながら、旅行の年には、親和会の幹事会で、あらかじめ教職員の声なき声をもとにして数例の行程が組まれ、教職員にアンケートをして行き先は決められる。今年は旅行の年、「もうそろそろ外国旅行でもしては、韓国なら費用も手頃だし」「それに本学と大田大学校は姉妹提携しているし、一般の教職員が大田大学校を訪問する良い機会であり、実際に見聞することによって両大学の交流は真に深まり、国際交流の実を上げることが出来る」というわけで、行き先の候補になり、最終的に教職員へのアンケートで韓国旅行は決定した。

準備万端進められた。参加申込者は100名を越したが、当日の参加者は89名であった。

行程の初日、午前５時40分大学をバスで出発、福岡空港へ、出国手続き後、午前10時ＫＡＬは離陸、午前11時10分金浦空港着。近い国である。午後はソウル市内観光やショッピングであったが丁度北朝鮮から政府要人の来訪で国立博物館に入れず景福宮と免税店まわり。ホテルニューワールドでソウルの一夜を過ごす。

２日目午前中、国立博物館見学後バスで大田へ、儒城リベラホテルで休憩後大田大学校訪問。顔見知りの教職員や渡辺教授の出迎えを受け、歓迎のセレモニー会場へ、李漢燮企画室長の司会で歓迎式典が行われ、親和会幹事長の訪問の挨拶、呉熙弼総長の歓迎の辞、菅理事の挨拶。「よへほ人形」の贈呈後、大田大学校の全容を私どものために編集されたスライドで紹介された。国情こそ違え創立10年間で25学科の私立総合大学への発展の勢いに敬服した。

（大田大学校での歓迎式典）

夜はリベラホテル百済ホールで、大田大学校主催で親和会員のために「国楽の響宴」と銘打って催され、①宮中音楽（雅楽）、②伝統舞踊、③伽倻琴独奏、④民族舞踊、⑤風物遊び等、雅びやかな素晴らしい歌舞音曲の中に我を忘れる時を過ごした。その後本会主催の夕食会に大田大学校の教職員を招待し、①幹事長挨拶、②会長（岩野学長）挨拶、③来賓挨拶（大田大学校総長）の後乾杯。両大学交流の夕食会は盛会裡に終わり、各自大田の一夜を満喫した。

３日目は大田を後に民俗村へ午前中見学。ここには韓国各地の農家やヤンバルの家が配置されている。親しくなったガイドさんの案内で古い農家やヤンバルの家等見て廻ったが、ただ見て廻るだけでは見逃す家々や昔の生活の様子を名調子の解説で大いなる知識を楽しく得ることが出来て有意義であった。

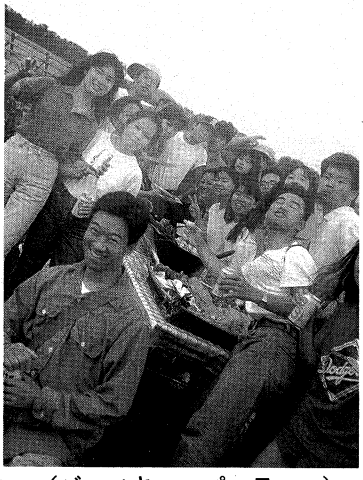
昼食後ソウル市内で買物の後金浦空港へ。途中車の洪水にあい、やっと空港へ到着。午後６時10分金浦空港発、午後７時15分福岡空港着。入国手続き後、バスで大学へ午後10時30分無事帰着した。　（1990年12月執筆）

# 第4回モンタナ研修団24名訪米

## モンタナ・サマープログラムを終えて

熊本商科大学助教授　北原　明彦

7月29日（日）午後3時頃、研修団はボーズマン空港に到着した。熊本はうだるような暑さであるのに対してここボーズマンは陽射しは強くても日陰の空気は涼しいくらいであった。海抜2500メートル以上はあるような地域だけに空気は薄いが、山並みは阿蘇にそっくりである。送迎のスクールバスに乗り込み30分程でＭＳＵに到着した。ここで3週間の研修が行われた。8月17日（金）早朝ロサンゼルスに向けて発つまで午前中9時から正午まで英会話、午後2時から4時まではアメリカ歴史についての講義を受講。週末の金曜土曜はアウトドアスポーツや観光が準備された。8月8日から10日はヘレナのキャロル大学を訪問した。学生はそうした多忙なスケジュールを完全に消化した。文化の異なる地域の人々と融和することは難しいものの、相互理解を深めてもらえたように思われた。



（バーベキューパーティー）

帰国後の間もないある日、礼状が準備された頃、予想されなかった手紙が団長の岡本先生のところに舞い込んだ。こちらが英会話やホームステイ先で大変お世話になったジュリア先生からの手紙であった。文面は次の通りである。

I wanted to take a moment to tell you how very much I enjoyed and appreciated the students you brought to Montana State University this summer. I truly feel that they are an exceptional group of young people.

Their enthusiasm, their willingness to try to speak English, their appreciation for even small efforts that I, and others, made to improve their stay—just their generally positive attitude really made them a joy.

I sent short thank-you notes to the host families after you left. Several of them sought me out to say I didn't need to thank them. They said they enjoyed the students so much, and that they wanted to thank me !

I have taught English to many foreign students over the past few years, and I do enjoy my work. However, I found this particular group to be an unusual pleasure and wanted you to know that. They surely have bright futures ahead of them.

我々が心から感謝しつつ帰国したことが、先方からも感謝され礼状が即座に送られてき

たのである。ジュリア先生が特別並外れて感動家でない様子でもあったら、この手紙は自然な行為としか考えられない。するとアメリカ人は世話をしたとか世話になったという義理というよりも、義務を互いに行使することで相互に働く喜びや充実感、またフェアな人間関係としての相互信頼が確立するのかもしれない。この感動は出会いに対する感謝の心が存在するかなどとも思います。我々も勿論この夏に出会えた人々に感謝しますし、また再会できることを楽しみにしております。本学学生の時間厳守、自主性や誠実さは元来彼らのモットーでもありましょうが、やはり4回目ということで先人たちの努力の蓄積的な効果や今回初めての自治会のメンバーも含めて参加したこともあり、かなり機動力のあるメンバー構成であったことも確かです。本当に充実した一ケ月でした。お世話になった方々に心から感謝いたします。

最後になりましたが、特に多額のご寄付をいただいた志文会の皆様に感謝しつつ筆を置きます。　（1990年12月執筆）

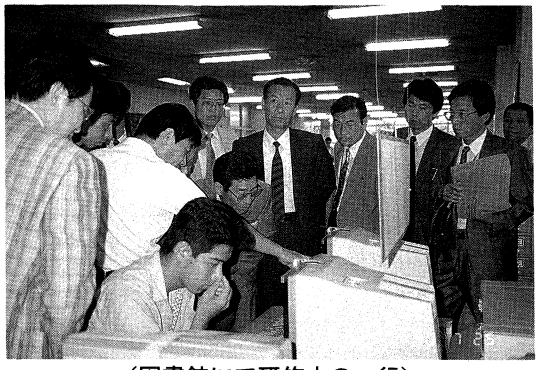
## モンタナ研修団日程表

| 月　日 | 日　程 | 宿　泊 |
|---|---|---|
| 7／28(土) | 成田→ポートランド→シアトル・市内観光 | ホテル |
| 29(日) | シアトル→ソルトレークシティー→ボーズマン着 | MSU寮 |
| | MSU到着後ティーツ学長宅にて歓迎会 | 〃 |
| 30(月) | MSUにて研修・英会話3時間・歴史1時間 | 〃 |
| 31(火) | 〃　・英会話3時間・歴史2時間 | 〃 |
| 8／1(水) | 〃　・英会話3時間・歴史2時間 | 〃 |
| 2(木) | 〃　・学内見学・モンテイン先生宅訪問 | 〃 |
| | MSU博物館見学 | |
| 3(金) | 〃　英会話3時間・歴史2時間 | 〃 |
| | ジェイク牧場での乗馬 | |
| 4(土) | 川下り、キャンプ | 山小屋 |
| 5(日) | ハイキング、湖でのスイミング、ピザパーティー（コンパ） | 〃 |
| 6(月) | MSUにて研修・英会話3時間・歴史2時間 | MSU寮 |
| 7(火) | 〃　・英会話3時間・歴史2時間、フルーク夫人訪問 | 〃 |
| 8(水) | MSUにて研修・英会話3時間→ヘレナへ移動→モール見学 | ヘレナ |
| 9(木) | キャロル大学訪問・講義・州庁舎見学、Gates of the Mountains見学 | 〃 |
| 10(金) | キャロル大学で講義、Lewis & Clark Caverns →ボーズマンへ移動 | MSU寮 |
| | 警察署見学 | |
| 11(土) | イエローストーン国立公園見学 | ホテル |
| 12(日) | 〃 | 〃 |
| 13(月) | 金鉱山跡地見学 | MSU寮 |
| 14(火) | MSUにて研修・MSU自治会との懇談 | ホームステイ |
| 15(水) | 〃　・オルソン先生との施設見学 | 〃 |
| 16(水) | お別れ会 | MSU寮 |
| 17(金) | ボーズマン→ソルトレークシティー→ロサンゼルス・市内観光 | ホテル |
| 18(土) | ユニバーサルスタジオ見学、UCLA等見学、県人会訪問 | 〃 |
| 19(日) | ディズニーランド観光 | 〃 |
| 20(月) | ロサンゼルス→サンフランシスコ・市内観光 | 〃 |
| 21(火) | サンフランシスコ・終日自由行動 | 〃 |
| 22(水) | 〃　・野球観戦 | 〃 |
| 23(木) | サンフランシスコ→ポートランド→成田 | 機内 |
| 24(金) | 成田空港→福岡空港→本学 | |

# 大田大学校教職員研修団来学

1990年7月24日から28日にかけての4泊5日の日程で韓国の姉妹大学大田大学校より11名の教職員研修団を迎えた。

| 月日 | 行　　程 |
|---|---|
| 7／24 | 来熊 |
| 7／25 | 表敬訪問、本学にて研修<br>夕方市内観光、歓迎夕食会 |
| 7／26 | 終日阿蘇観光 |
| 7／27 | 別府観光 |
| 7／28 | 離日 |



（図書館にて研修中の一行）

# 第4回大田大学校学生研修団来学

今年度も大田大学校から4回目の学生研修団を迎えた。今回は企画室長初め6名の教職員の引率者と24名の学生に加え、3名の韓国人記者という総勢33名が来熊した。

（熊本城前にて）

| 月日 | 行　　程 |
|---|---|
| 7／2 | 来熊、歓迎夕食会 |
| 7／3 | 表敬訪問、特別講義、キャンパス案内、市内観光、ショッピング |
| 7／4 | 知事表敬訪問、ＲＫＫ訪問、学生交流 |
| 7／5 | 阿蘇観光、テクノポリスセンター見学 |
| 7／6 | 離日 |

来学する学生研修団には、より深い相互理解を目的に例年ホームステイ体験を提供していますが、今回も20名の学生の皆さんを初め教職員の方々にご協力いただき、誠にありがとうございました。紙面を借りて御礼申し上げます。

国際交流委員会

# 甲南イリノイ学生研修団来学

## ホストファミリーはおもしろい

国際経済学科１年　岩切　智子

軽い気持ちで引き受けはしたものの、ホストファミリーを引き受けるのは初めてだったので、家族ぐるみで色々なことを相当悩んだ。

例えば、トイレが和式であること、家が狭いこと、朝はごはんとみそ汁だけでいいのか、洗濯物は家族のものと一緒に洗っていいのかなど、もっと小さいことも挙げればきりがないほどだった。

しかし実際にブルックと一緒に暮らしてみると、「なーんだ、こんなものか」と思ったくらい全然手がかからなかったので意外だった。おふろや和式トイレの使い方も分かってるし、日本食ならなんでもＯＫ、特に日本語に関して言えば、一緒に世間話もできるほどばっちりだった。

彼女との４日間、主に何をしたかといえば、まずは、２日目の新歓ピクニックの朝に彼女の友達から今日が彼女の誕生日だということを初めて聞きその夜、誕生パーティーを開いた。外人に洋食のごちそうをだすのも考えものなので、もちろん日本食を出した。鯛やおにしめ、赤飯など。でもやっぱりケーキだけは欠かすことができなかったが。私の友達も何人か呼び、にぎやかなパーティーとなり、その後はみんなで花岡山に夜景を見に出かけた。

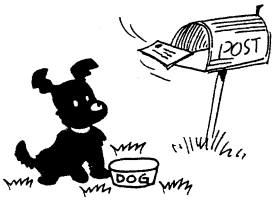
３日目には高森に田楽を食べに行った。私は彼女が我が家に来る前から絶対に田楽を食べさせてあげるんだ！と強く思っていたくらいなので、これで思い残すことはないと思った。しかし、時間の都合で白水村の白川水源を見せてあげられなかったことが少しだけ心残りだ。

（ホストファミリーの皆と本館前にて）

いよいよ彼女が帰ってしまう日の朝、出発まで３時間程あったので、水前寺公園と熊本城に連れていった。彼女があまりに感心してじっくりと見てまわったので、出発の時間ギリギリに学校に着いた。

彼女がバスに乗る前、別れをおしんで、しばらく抱きあっていた時の感じは今でも忘れない。たった４日間という、とても短い間だったが、言葉では言い表せないほど楽しかった。

もっと言いたいことは山ほどあるのだが、要するに「ホストファミリーはおもしろい。」というわけだ。　（1990年５月執筆）



# 交換教授姉妹校滞在印象記

## 韓国・大田大学校の思い出

熊本短期大学教授　宮崎　俊策

ソウルから高速道路を南下して約2時間。忠清南道の道庁所在地に、姉妹校の大田大学校がある。市内の一角から展望すると、霞がかった小高い丘の上に校舎がそびえ、総合大学としての偉容を誇っている。

（友人達と馬山の花見へ）

この地に交換教授として到着したのが昨年の3月。その後半年間の生活経験を持った。大学では到着した翌日からの講義開始。授業の2コマは1・2年生対象の135名、3コマは3・4年生を中心として30名という、週5コマの担当であった。到着早々から一部学生と大学が対峙するデモ光景と平行して始まった授業だったが、他方では学生自身の中に、教師の身近に接して様々な手伝いをすることが自己成長につながるという姿勢が根強く残っている。そのせいか、緊張して終わった最初の授業直後から、私の研究室にも遠慮がちに数名の学生が訪ねてきた。

来室した学生から最初に出た言葉は教授先生様であり、研究室の手伝いをしたいという。初めていわれる言葉の何ともいえぬ心地好さ・・・（最も日本語表現としては不適切なのでその後に修正した）。そして翌日にはこの学生が、他の友人を、その後には友人が他大学の友人をと、研究室には数日後から多様な学生の出入りが始まった。まもなく単身のアパート生活の場が賑やかになったのはいうまでもない。

学生達には本当に世話になった。休みの時は、先生不便なことはないですか、と必ず電話が入る。そして他大学も含めた学園祭への案内。古式料理を実習にて作った家政学科学生達からの試食への招待。ソウル・水原・扶余などの小旅行。5月中旬の先生の日にもらった各種プレゼント。焼肉セット一式を抱えて出掛けたハイキング。残った食物を捨てられず、バスの後部席で頭を潜めて頑張った巻き寿しの味。市場へ出向いたついでに必ず立ち寄ったトンドンジュとピンデットの店。もちろんアパートでも定期的に続けた学習会・・・歳月がたつほどに多くの学生達の思い出がよぎってくる。

また単身生活では辛かろうと、多忙な中を外に連れ出してくれた先生達。2家族に誘われて出向いた鎮海の花見や、大川の雄大な海。中国から伝来の白い松の木の見学や釜山の一泊旅行など、言葉につくせない数々のもてなしを受けた。

大陸的な大らかさの中で友人をもてなす懐の深さ、そして互いが家族を大切にしながら生きていく姿など、多くを学んだ半年間だった。大田大学校の皆さん、ほんとうにありがとう。　（1990年5月執筆）

〔1989年3月～8月　大田大学校滞在〕

## 熊本商科大学・熊本短期大学滞在印象記

大田大学校　助教授
任　相　一

熊本商科大学・短期大学と姉妹関係を結んでいる大田大学校からの五回目の交換教授として日本にきた私は今まで７ヶ月間いろんな事を感じ又いろんな事を学びました。

まだ、日本についてそして商科・短期大学について正確に詳しくのべる事は出来ませんが７ヶ月間の経験の中で感じたことを少しばかり書いてみたいと思います。

まずは私の来日が両校の関係と私自身に大きな意味を与えてくれたということです。

その理由としてあげられるのは今までの三人の先輩教授の方がみんな戦前世代だということにくらべて私は戦後世代だという点、又私の場合日本語をこちらから派遣されて来た方から教わって商科大学に来た初めての人だという点、そしてもうひとつは私の専攻が経済学なので、商大の学問雰囲気をもっと深くまで把握することが出来たという三点です。

次に大学の印象として感じた事は第一、大学がとても民主的に運営されていることですべての機関（学長、部長、研究所長、委員会長など）が直接選挙で選出された方々によって活発に動いているというところです。

第二に、体系的に設置されている国際交流室そしてとても親切なシステムと環境で大きな感動をえました。もとは“システマティックな親切”と“暖かい親切”は同時に取りえないことですが、商大はできないことを可能にした。これは商大が語学専門学校として出発した歴史と国際化時代に適応する人材を育てようとする教育目標に由るものだと思います。

学風は大抵アカデミックな面より実用的な面が優先されているような印象を受けました。経済学科の場合をみると、経営学と法学科目を関連科目として選択できるように門戸を開放することによって卒業後実用的な社会需要に適応しやすい教育制度をすすめています。

研究棟の立派な専門図書館と職員の方々の優しさは私の学問的成長にとても大きな力となっています。

（歓迎夕食会時の任先生ご一家）

最後に学生達に望む事は図書館などをもっと利用し学問にもう少し励んでほしいと思います。そして校内本屋と文具店が少し小さいことと市内古本屋などに経済・経営関連書類が多くないのはとても残念に思います。

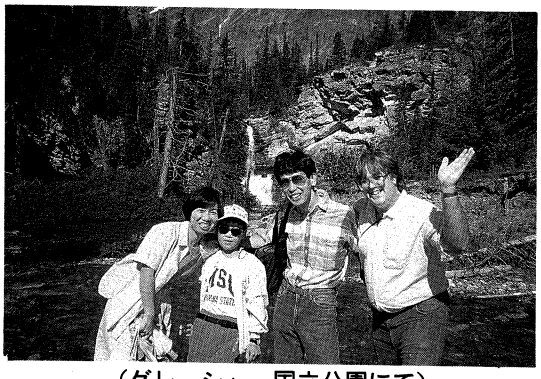
商科・短期大学は将来の国際社会の中での日本の重要性を認識して国際化時代に合う日本紳士を輩出しようとしている先頭走者の一つだという印象を強くうけました。このような商科大学の一員としてすごすことができてとてもうれしく思っています。又私の大きな誇りとなっています。　（1990年５月執筆）

〔1989年９月～1990年８月　本学滞在〕

## モンタナ滞在印象記

熊本商科大学教授　田中　利彦

ソルトレークで乗った飛行機から見るボーズマンは、出発前の予想に反して広々とした大地にひっそりと存在しているようでした。出発前地図でみて、ボーズマンはロッキー山脈の山中に位置し、周囲を山で囲まれた、高度の高い所にある町と想像していたからです。確かにキャンパス内のアパートメントからすぐ間近に左右に各一つずつ美しい山を見ることができます。しかしながらロッキー山脈の雪を抱いた壮麗な山並は遠くにあり、日本の風景に慣れていると、平坦な平野が広がっているような錯覚を覚えます。



（グレーシャー国立公園にて）

一年間のボーズマンでの生活の後、今つくづく思うのは、「寒い所は寒い時がベスト」ということです。冬のボーズマンは確かに熊本と比べるとかなり寒くなりますが、室内はセントラルヒーティングで快適な温度に保たれており、移動には車を使うので寒さ知らずです。雪の降り積もった山々の景色は魅惑的で、とりわけ朝焼けと夕焼けは幻想的な世界へ私達を誘ってくれます。イエローストーン国立公園に近く、美しい自然に恵まれたボーズマンはウィンタースポーツの楽園ともいえる所で、特にスキーは最高です。大学のある町で車で30分以内の所に大きなダウンヒルスキー場があるのはアメリカ広しといえどもここだけと言っても間違いないでしょう。イエローストーンでのクロスカントリースキーは真の意味でのクロスカントリーの楽しさを満喫させてくれます。またスケートも気軽に近くの公園で勿論無料で楽しめます。

一方、美しい自然もさることながら、住んでいる人々も西部劇の世界をそのまま引きずっているような姿格好で、彼らの素朴でフレンドリーな人柄には打たれました。私の日本語の授業を取ったジョー・アーズリー君は非常に好感の持てる青年で、兄さんが日本企業と関係しており、北海道へ行ったことがあるせいもあるのですが、モンタナ人の一例を示していると思います。アメリカの片田舎とも言えるモンタナでは極端に東洋人、黒人の数が少なく、ファーストフード店においてさえも白人の可愛い女の子が愛想を振りまきながら迎えてくれます。人の付き合いにおいてまさに古き良きアメリカ西部が感じられる所です。

ＭＳＵの大学関係者は非常に親切に対応してくれ、当初モンタナ大学を希望していた私にとって結果的にＭＳＵへ行くことになったことは非常に幸せだと思っています。残念ながらＭＳＵには経済学部がなく、研究面で多少支障がありましたが、小さく綺麗にまとまった感じのボーズマンの町が今は懐かしく思い出されてなりません。また機会がありましたら、ビッグマウンテン、レッドロッジでのスキーを兼ねて再びボーズマンを訪れたいと思います。　（1990年５月執筆）

〔1989年４月～1990年４月　モンタナ州立大学滞在〕

## 熊本学園の皆さんへ

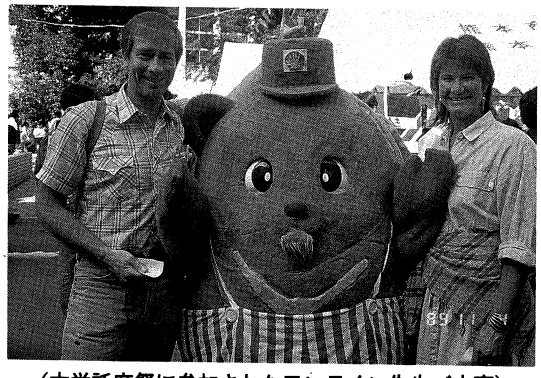
モンタナ州立大学準教授
クリフ・モンテイン

モンタナ州立大学から交換教授として、妻のジョーンと共に昨年の9月に赴任いたしました。赴任して以来、教職員の皆さんや学生との交流、付近の山でマウンテンバイクを楽しんでおります。熊本県の環境保全課の人達ともお会いし、熊本の古くからの農業について勉強しているところです。これらの他に、札幌で行われた国際スキーマラソンの運営のお手伝い、タイ北部の山岳地帯の部族の訪問、韓国の土壌学者との旅行、熊本の地球の日実行委員会のお手伝いも経験しました。また、商大・短大で英会話の授業を担当しています。

さて、日本が世界の大国として台頭してくるにつれて、一つのパラドックスが見えてきます。日本の文化は自然との調和に基づいています。ですから、人間が自然の一員として発達してきた以上、我々が自然との調和の中で生きていこうとすることは当然です。今日、先進工業国の人々が、自然との共存の知恵を日本に求めています。しかし、日本人は工業化を通して獲得した物質的な豊かさに目を奪われています。日本の人達には、健全な経済は健全な自然環境に直接依存していることが、残念ながら理解されていないようです。

コミュニケーションや人の移動が容易になるにつれ、世界の人々がお互い外人ではなく隣人になろうとしているのです。世界が一つになろうとしているのです。そして、これからは科学技術を、人間が自然に逆らう形ではなく自然との調和を保ちながら生きていけるように用いることが求められてきます。

熊本学園はこの点において日本をリードできるし、日本も世界をリードすることが可能だと思います。産業はエコロジーの法則に従った方が、より良い効果をもたらします。大学は批判的精神や創造性に富み且つ世界的視野を持った人材の育成に努めなくてはなりません。学生は、単に会社に就職するだけのことを超えた、未来への大きな目標を掲げることが大切です。さらに、これまでの伝統と歴史、並びにエコロジーの法則と人類のニーズを知識としてだけでなく、その生きた姿を体で学ばなくてはなりません。教室で学ぶだけではなく、現実の世界の中で学び取って欲しいと思います。



（本学託麻祭に参加されたモンテイン先生ご夫妻）

熊本学園は調和のとれた産業の全体の発展に貢献することができると思います。そしてこの全体化が、長い目で見れば、実は人類にとって有益なわけです。学園教職員の方々の御努力で、世界が今日本に求めている批判的精神と決断力を備えた人材を育てられるように、大学教育を改善することは可能だと考えます。世界経済の新しい担い手となった日本は、こうしたことに着手する絶好の位置にあると思うのです。熊本学園の皆さんの限りない可能性の追求を、心から願ってやみません。

（1990年5月執筆、日本語訳：吉川勝正委員）
〔1989年9月～1990年7月　本学滞在〕

# スポット

## 交換教授往来

1990年2月下旬、渡辺晧教授（細胞遺伝学）が第3回交換教授として韓国・大田大学校へ赴任され、1年間の滞在を終えて今年2月に帰国される予定。

8月下旬には明石喜嗣教授（英語）が四大学間交流プログラムの第3年度交換教授として米国・モンタナ州立大学へ赴任。1年間の滞在予定である。

同じく8月下旬には韓国・大田大学校より第6回交換教授の具本璋副教授（労使関係論）が来学された。1年間の予定で本学では韓国語を担当していただく。

9月には米国・モンタナ州立大学よりグレゴリーD．オルソン助教授（体育）が来熊、12月末までの日程で英会話を担当いただいた。

後を引き継いで同姓同名のグレゴリーH．オルソン先生（英語）が日本語の勉強にと早くも10月中旬に来熊され、本年1月より英会話の指導に当たられている。

10月下旬には杉田憲道先生（簿記会計）が第1回交換教授として中国・深圳大学へ出発された。滞在予定期間は半年間。

## 外国語研修センター開講

1990年9月より本学内に外国語研修センターが開講された。同センターは、本学学生を対象に、正課外にネイティブの先生方に授業していただくことで、外国語の運用能力の向上をはかることを目的としている。外国語は、英語、韓国語、中国語、そして留学生のための日本語。

## 中国・深圳大学の新学長来学

1990年11月、深圳大学の魏佑海（ウェイユーハイ）学長が来学され、21日の講演会を初め多忙な3日間のスケジュールをこなし、本学との交流促進の確認をして帰国の途につかれた。

# 第2回長期交換留学生報告記

## 深圳大学滞在印象記

商学科卒業　林田　真奈美

〔派遣先：深圳大学　1989年3月～1990年2月〕

同じ東洋でありながら、国が違えば生活習慣、文化、価値観、考え方が違って国際交流がとても難しい事を一年間の深圳大学留学で理解できました。

深圳大学に着いて最初の三ヵ月は聞く力、話す力共、全くと言っていい程無く、苦しい状態でした。その後、毎日授業に参加するに従い、友達も出来てカタコトながら会話する様になりました。不思議な事に不十分な聞き取りとカタコトの喋りでも一生懸命に耳を傾けてくれ、ジェスチャーを加え何度も復唱しながら会話すると言葉の数以上に通じる事がありました。

中国人の友達がたくさん出来て、毎日皆入れ替わり立ち替わり、時には友達同志そこで初めて知り合い友達関係になった友達もいて、よく遊びに来てくれましたが、毎日楽しい事ばかり続くわけではありませんでした。価値観、考え方の違いでお互い見つめる高さが合わず衝突した事もありました。友達関係のあり方に一つ違いがあると思いました。

友達関係が深まるごとに信頼関係が出来て、お互い助け合い、気持ちも分け合いますが、日本人は、ある程度のプライバシーを持ちます。経済が豊かで物があふれ、量から質志向に進む事でプライバシーを守る事が出て来ましたが、中国では、友達関係はもっと大きく物的共用も加えられます。そんな中国人からしてみると、日本人はケチと思われ、日本人からしてみると、中国にはプライバシーが無いと思うでしょう。お茶を入れるのでも、日本ではカップ半分程しか入れず、少ないのが上品だと美しく見ますが、中国では、いつもお客様にカップ満杯のお茶を入れておく事で歓迎の気持ちがあると見ます。

（深圳大学の友人と、筆者右から３人目）

中国を出国する前、友達と「再見！」（さようならの意味）と言い別れました。また会いましょうという意味の漢字を書きます。再度、中国を旅行し友達と再会出来るのを楽しみにしています。　（1990年５月執筆）

## 深圳大学滞在印象記

経営学科４年　伊藤幸太郎

〔派遣先：深圳大学　1989年2月～1990年2月〕

深圳から熊本に帰って来てすでに三ヵ月になります。就職活動が忙しくなった今、ようやく留学した一年間を自分なりに整理できたようです。それを大まかにまとめてみます。

学生生活は最初、日本ではあまり見かけない南国の花や木、私の想像とは違って意外と樹木が少ない街など初めて目にするものや、私の想像や予想とは異なる体験ばかりでとて

も新鮮で授業も太極拳や広東語、中華料理など色々な講座があり、楽しく授業を受けていましたが、二ヵ月ぐらいからやや新鮮さも薄れてしまい、教室と宿舎の往復を繰返す単調な毎日になりました。私は、その単調な毎日をなんとか打破する為、授業が終った後はなるべく部屋にいないようにして友達の部屋へ遊びに行っていました。

しかし、金曜日の午後から日曜日までの休日に息抜きを兼ねて香港へ日本料理を食べに行ったり、一泊または日帰りできる程度の町へショッピングへ行っていた以外は結局ほとんど毎日単調なペースで過ごしてしまいました。その分だけ長期休暇の楽しかった旅行は今でも鮮明に思い出すことができます。広州の射撃場や海南島での海水浴、その海南島で訪れた少数民族の苗（ミャオ）族の村などは特に強く印象に残っています。

また帰国後よく人に天安門事件を体験した印象を聞かれますが、私のいた所はこれといった危険はなく、私への影響は授業が一時期中断しただけでした。

留学体験で視野が広がった様な気がし、考え方も変わったようです。これから生きていく中で、必ずこの経験が役立つと思います。貴重な体験ができて非常によかったと思っています。　（1990年5月執筆）

（海南島苗族の村にて）

## 英語とジャズの日々

経営学科4年　橋本　祐二

〔派遣先：モンタナ州立大学　1989年3月～1990年3月〕

大きい。モンタナを一言で表現すると、これ以外浮かびません。桜散る3月下旬の日本から、銀世界のモンタナに到着してからしばらくはそのスケールの大きさに圧倒されっぱなしでした。しかし、感激する間もなく最初の学期が始まり、大学受験の時よりも勉強したなと思える程、予習復習やレポートに追われる毎日でした。最初のクラスはアメリカの銀行システムをテーマにしたもので、レベルも3年生ということもあり、追試まで受けてなんとか単位を取ることができました。その他にも政治学を履修し、元空軍大佐という先生とのディスカッションで世界情勢の裏側を知ることができ、興味深いクラスでした。そして、私は商大でスイングバンドに所属していてサックスを持参して行ったので、MSUのジャズバンドにも参加することができました。最初のうちは言葉がうまく伝わらないせいか、友人との話題は日本の事が多かったものの、留学生がサックスを吹くというのが珍しいのか、音楽科の人達とは殆ど顔見知りになれました。結局このバンドには一年間所属して、コンサートなどで十分楽しむことができました。

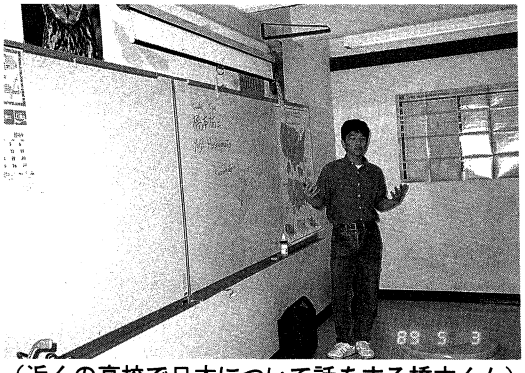
私の場合3月派遣で、春学期が終ると3ヶ月半の長い休みに入るので、かねてより計画していたバスによる全米縦断の旅行に出発しました。約2ヵ月かけて、ボストン－マイアミ－サンディエゴ－シアトルを結ぶ大きな円をつくり、よくもあんな無茶をしたものだと我ながら感心しました。この旅行を豊かで実

りあるものにしたのは、観光地ではなくその土地で出会った人達でした。様々な人種、国籍を持つ人々が集まるアメリカでは、バスで隣に座ればそこに会話が生まれ、しばしば議論にまで発展しそこに新しい世界が開けました。

9月下旬に再びモンタナに戻り、すぐに秋学期が始まりましたがすでに渡米して半年が経過していたので、授業も殆ど理解できるようになっていました。そこで、ひとつの挑戦としてスペイン語を履修しました。授業は全てスペイン語で、文法などの解説は英語でというクラスでなんとAを取ることができました。経営学もディスカッションやスピーチなどで日本人としての意見を述べ、日米貿易問題等に関する見解の違いを知ることができたのは大きな収穫だったと思います。結局一年間で32単位が取得できたので、自分では満足しています。

今回の留学は私にとってこれまでの自分を総点検し、新たな自己を発見できたという点でこれからの人生の糧となっていくことに疑念の余地はありません。

最後になりましたが、この様な機会を与えて下さった大学と志文会の皆様に厚く御礼申し上げます。　（1990年5月執筆）



（近くの高校で日本について話をする橋本くん）

## 「自由濶達、師弟同行」
## ――私が感じた熊本商科大学

深圳大学コンピュータ学科4年　劉　凱　東

留学生にとって、留学する前にもちろんできるだけ留学先の国、更に学校について色々と調べるでしょう。私も熊商大に来る前に、熊商大からの交換留学生たちに聞いたり、熊商大に関する資料を読んだりしましたが、ただ皮相的なことだけわかりました。でも、熊商大が私にとって大きな魅力があります。特に私は建学の精神としての「自由濶達、師弟同行」に最も興味がありますが、その中身が分からなかったので大変知りたかったです。

「百聞は一見に如かず」、今まで私は熊本商科大学ですでに半年勉強しました。商大には確かにいたるところまでその建学精神が現れていて、私は様々な目新しい感じと深い印象を受けました。これらの印象を全部書きたいと思いますが、長い話になるので、ここで一番印象深いことを2つだけ皆さんに話しましょう。

私は商大に来た当初、ちょうど一年一回託麻祭にあたり、商大の学生と一緒に楽しい三日間を過ごしました。商大生は託麻祭の中ですばらしい熱意を持ち、豊かな個性と創意を現したと同時に強い協調性と自主性を持っていますが、私に初めて深い印象が残りました。ふだん、多くの商大生と接し、彼らを見て、商大生は勉強するときは真剣に勉強し、遊ぶときは精一杯遊ぶのだということが分かってきました。そういうふうに勉強するときは勉強、遊ぶときは遊び、と区別できる意志の強い彼らに私は感心せずにはいられません。こ

れは「自由濶達」の精神の現れではないでしょうか。

もう一つはゼミのことです。これは日本教育制度のすばらしいところだと思います。私は三つのゼミを聴講していました（笹山先生の二つと小島先生の一つ）。ゼミでの楽しさを十分に味わっています。そこでは学問の楽しさを教わると専門的な知識を身につけるだけではなく、少人数制で先生と学生また学生同志のコミュニケーションを通じ生涯の師が見つかり、一生のつきあいができる友が得られるだろうと、私は思います。これも「師弟同行」の現れでしょう。

美しいキャンパス、学問の造詣の深い先生方、勤勉で親切な職員の方々、蔵書量が多くて利用しやすい図書館、そして目立ってすすんでいる国際化・・・商大には書くに値するところは数えきれないでしょう。

最後に、熊本商科大学のこれからますますのご発展を、私は心から願っております。

〔1989年10月～1990年10月　本学滞在〕

（1990年5月執筆）

（国際交流室を訪れた劉剴東くん）

## 本学滞在印象記

深圳大学国際金融学科3年　廖　東　鳴

有線放送から自分の大好きなサザンオールスターズの歌を楽しんでいる時でも、また東京の上野公園で満開の桜の美しさに陶酔してしまう時でも、そして各国の留学生と共に阿蘇草千里へピクニックに行く時でも、私は日本に来て、こんなに沢山の異国の先生達や人々と知り合いになることが夢のようだとつくづく感じさせられてきた。

日本経済を勉強するため交換留学生として熊本商科大学に来ている私のために、大学側は生活用品のすべて完備している住み心地いいマンションを提供してくださり、毎日静かに自習に専念でき、またテレビを見たり、音楽を聞いたりすることもできて、優雅な生活を送っている。

福岡空港まで出迎えに来ていただいた時から、国際交流室の方々が私のすべての面倒を見てくださり、細かいところまで配慮していただき、私は自分の家に帰ったような気がする。忘年会の時や、阿蘇草千里にいた時や、新入生交歓会の時など、私たち留学生は国際交流室の先生達と一緒に歌を唄ったり、笑ったりして、数えきれない良い思い出が残された。

また特に感謝したいのは私の担当教授笹山先生で、先学期に私は先生の演習Bの講義をうけたが、日本語がまだ不十分なので、先生は辛抱強く問題を何度も繰り返して説明してくださった。またワープロとコンピュータで経済動向グラフのつくり方をやさしく教えてくださった。更に黒板に経済学の専門用語にふりがなを書いていただいた時もある。

図書館の方々からコンピュータでの書籍の調べ方を教えてもらい、日本語やレポートなどのための参考書も捜し出してくれた。皆さんのおかげで、私はいろんな知識を身につけることができた。

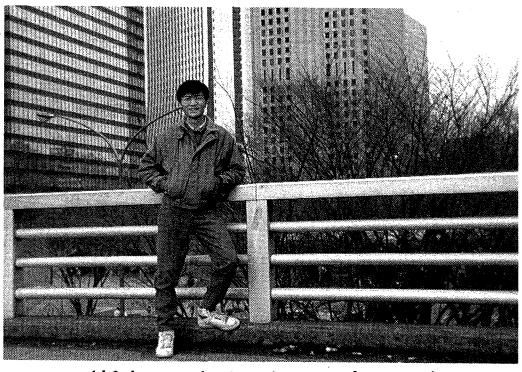
四月末に在熊外国留学生は、御船町へホームステイに行った。私のホームステイ先のご家族の皆さんはとても親切で楽しかった。二日間留学生たちは御船町の友人達といっしょにグランドゴルフをしたり、野鳥の森へピクニックをしに行ったりして、まるでほんとう

の家族のようであった。

月日が経つのは誠に早いものだ。東京の大家さんが私に送ってくださった俳句「椿いけ、水仙いけて、桜まつ」のごとく、瞬くうちに半年経ってしまった。この半年の間に、お正月の大分温泉の旅や、春休みの京浜の旅、またゴールデンウイークの天草での魚釣りの旅などを通じて、いろいろな人々と触れ合ったり、よくお互いにコミュニケーションしたりして、大変いい勉強になった。私にとって一生忘れられない思い出になるでしょう。

〔1989年10月～1990年10月　本学滞在〕

（1990年５月執筆）



（新宿のスカイスクレーパーにて）

# TOPICS

## 米国・サンアントニオ市との交流始まる

熊本市と市の姉妹都市である米国・テキサス州サンアントニオ市との間で大学間交流が開始され、1990年度は本学から経済学科４年生の村上靖成君が派遣され、派遣先であるアワーレディオブザレイク大学からロバート・テロ君（写真左）が来学した。

## 第９回春期モンタナ派遣短期留学生

〔モンタナ州立大学〕

経済学部国際経済学科１年　矢澤　恵子
熊本短期大学　社会科２年　高森　涼子
熊本短期大学　教養科１年　山本　礼子

〔キャロル大学〕

経済学部国際経済学科１年　橋本　美穂
経済学部国際経済学科１年　田嶋　隆二

（派遣期間：1991年２月５日～３月30日）

## 平成３年度長期交換留学生

〔米国・モンタナ州立大学〕

商学部　経営学科　２年　宮本　雅子
経済学部経済学科　２年　清田　俊秀

（派遣期間：1991年３月～1992年３月）

〔米国・キャロル大学〕

経済学部経済学科　２年　夘野木佐代子

（派遣期間：1991年８月～1992年７月）

〔中国・深圳大学〕

商学部　経営学科　２年　村橋　秀樹
経済学部国際経済学科１年　西村　美夏

（派遣期間：1991年２月～1992年２月）

特集　国際交流を考える　（2）

# 第1回　アンケート『国際交流を考える』

## ――本学教員対象――

1990年5月、国際交流レター編集委員会では、皆さんの国際交流に対するお考えをアンケートによって収集し、現在皆さんがどのように国際交流について感じられているかについて記事にし、本学の国際交流のほんの一端でもご紹介できればと考えております。実際記事にする内容には事欠きませんが、ここでは皆さんの国際交流に対するイメージをほんの僅かですがご紹介します。あまり深刻な問題については触れていませんが、今回は教員の皆さんに国際交流のイメージについて簡単なアンケートをお願いしました。しかし、レター編集委員の予想以上に真剣な皆さんのご回答をいただき、いかに重要な問題かが今更ながらわかった次第です。今回は51名の教員の皆さんに回答していただきました。ここで御礼を述べさせていただきます。ありがとうございました。

### 留学生と明るく挨拶！

最初に質問したのはどのくらい教員の皆さんが留学生と親しくされているかについてです。やはり授業の合間に彼らとちょっと話されたり、また学園内では皆さん楽しく留学生と挨拶されるチャンスがあるのでしょう。これは留学生が真面目に授業に出ている証拠でもあります。毎回授業に真面目に出ていれば先生も顔を覚えることができるのです。

**設問1（あなたは学内の留学生にどの程度コミットされていますか？）**

| 複数回答　100％＝51名 | ％ | 人数 |
|---|---|---|
| 留学生と挨拶さえしたことがない | 9.8 | 5 |
| 留学生と挨拶はしたことがある | 43.1 | 22 |
| 留学生と個人的に世間話をしたことがある | 29.4 | 15 |
| ホストファミリーになったことはある | 17.6 | 9 |
| なんらかの世話をしたことがある | 56.8 | 29 |
| 親しくしている | 27.4 | 14 |
| その他 | 7.8 | 4 |

## 3人に1人は学術交流

交換教授の先生とはどのようにされているかはやはり皆さん気になるところです。そのせいかもしれませんが、3人に1人はアカデミックな会話をされているとのことです。普通の会話もいつしか熱が入って、理論的な会話になってしまうのかも知れません。結構現在でも物足りないという方々がいらっしゃいますから、今後はさらにアカデミックになるのでは…

**設問2（あなたは学内の交換教授の先生方とどのくらい親しくされていますか？）**

| 複数回答　100％＝51名 | ％ | 人　数 |
|---|---|---|
| 挨拶さえしたことがない | 17.6 | 9 |
| 世間話はしたことがある | 29.4 | 15 |
| ディスカッションをしたことがある | 19.6 | 10 |
| 講演に参加したことはある | 31.4 | 16 |
| 授業に参加したことがある | 17.6 | 9 |
| 授業に協力してもらったことがある | 7.8 | 4 |
| その他 | 29.4 | 15 |

## 国際交流は大学の社会的責任です！

この質問はもっと慎重にすれば良かったと思っています。と言うのも、やや偏った質問でもっと良い項目がありますといったご意見を頂いたからです。国際交流とは大学の社会的責任という方が66.7％もいらっしゃいました。確かに「後進性の打破」というのは語弊がありますが、43.1％の方が「その通り」と考えられていたのです。「人類愛の実現」は大袈裟ですが、「違う」という方が17.6％もおられたのにはきっとそんな大袈裟な問題ではないと思われたのでしょう。

**設問3（あなたは国際交流をどのようにお考えですか？）**

| 単項目選択 100％＝51名 | その通り | | 違う | | わからない | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | ％ | 人数 | ％ | 人数 | ％ | 人数 |
| 個人的興味の問題 | 27.5 | 14 | 45.1 | 23 | 11.8 | 6 |
| 日本の後進性の打破 | 43.1 | 22 | 27.5 | 14 | 17.6 | 9 |
| 大学の社会的責任 | 66.7 | 34 | 9.8 | 5 | 11.8 | 6 |
| 人類愛の実現 | 58.8 | 30 | 17.6 | 9 | 17.6 | 9 |

## 本学の国際交流は開放的な親睦の機会

設問4では、本学の国際交流のイメージには**開放的な親睦のイメージ**がもたれているようです。**アカデミックなイメージ**に対して「その通り」としている方は「違う」としている方より少ないようです。しかし、実際はディスカッションなどをされたり講演に参加されているのですから、研究者としてご自分に厳しい姿勢がここに表れているのかな、などと良いほうに解釈しています。確かに姉妹校とはまだ交流が始まって長い歴史はありませんから、さらに今後国際交流の本格化が期待できるのかとも思います。しかし、皆さんの期待とやる気は回答率から言っても大変なものと思われます。

**設問4（あなたにとって本学の国際交流のイメージとはどのようなものですか？）**

| 単項目選択 100%＝51名 | その通り | | 違う | | わからない | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | % | 人数 | % | 人数 | % | 人数 |
| 新鮮なイメージ | 37.3 | 19 | 25.5 | 13 | 21.6 | 11 |
| 開放的なイメージ | 52.9 | 27 | 19.6 | 10 | 17.6 | 9 |
| アカデミックなイメージ | 27.5 | 14 | 37.3 | 19 | 17.6 | 9 |
| スポーツのイメージ | 2.0 | 1 | 54.9 | 28 | 23.5 | 12 |
| 親睦のイメージ | 94.1 | 48 | 0.0 | 0 | 5.9 | 3 |

## 今後とも活発になる国際交流は本学のイメージを向上させ、無形の財産になっている

設問5では国際交流の今後の見通しやイメージとの関係について伺ってみました。その結果、本学のイメージ向上に貢献しているのではないかということです。やはり、開放的であれば多くの人々が本学を訪ねられるでしょうし、また海外では貴重な体験ができますから、その意味ではさらに制度的に「留年覚悟」の上での1年留学は就職に有利な条件とはいえないのかも知れません。それも日本という国がかなり「島国」的なところがあるからでしょうか。本学の国際交流も日本の歴史とともに歩んでいると言っても過言ではないかも知れません。

**設問5（あなたは国際交流について、どのような意見をお持ちですか？）**

| 複数回答　100%＝51名 | % | 人　数 |
|---|---|---|
| 今後さらに活発になると思う | 66.6 | 34 |
| 本学のイメージを向上させてきた | 51.0 | 26 |
| 学生が就職する上で有利な条件を整備してきた | 23.5 | 12 |
| 大学の無形の財産である | 54.9 | 28 |
| その他 | 5.9 | 3 |

## 本学の国際交流に対する意見は多面的でした！

### 設問６（最後に本学の国際交流に対して何かご意見があればお聞かせください）

・外国は堂にいったもの。日本も努力して行かねば。
・一般学生と留学生との係わりが希薄。
・総論賛成各論反対の先生が多いのでは。
・インド、韓国、東南アジア諸国などアジアにもっと力を入れて欲しい。
・モンタナ留学について１年間プログラムの拡大を。積極的交流を期待します。
・生活面での相談にのったり授業外でも交流することが大切だと思います。
・学術交流、共同調査研究に進むべき。
・サークル単位の交流を。
・国際交流会館の建設。
・留学生の住居問題の解決。
・自由平等の見地からの交流。
・次の姉妹校はぜひ東南アジア（例、マレーシアなど）との交流を。
・本学の学生と留学生の日常的な交流はどの程度か、「交流の日」があってもよい。
・全学的な国際交流に程遠い。長期的発展の条件を探索すべし。
・あれもこれもと手を拡げずに（交流対策を増やさず）息の長いきめ細かな交流を続けるべき。
・留学生受入上の制度的不備の解消を。①ハード（留学生会館）、ソフト（日本語教育勉学指導、日本での生活相談など）両面での格段の整備充実が必要である。②留学生に日本（本学）留学を一生涯感謝の念を持ちつつ過ごしてもらうことが最終目標と考える。このため、①の条件整備を行なうほか、特待生制度（アルバイトが不要な程度の金銭的援助）の創設を考えられてよい。フルブライト留学生の日本版を本学で作り上げるとよい。換言すれば日本留学に好感を（心から）持ってもらえるものにしたい
・アカデミックな国際交流を。さらに質、量ともに発展させるべきである。特にすべての外国人留学生が「反」あるいは「嫌」日感情を抱いて帰国することのないように、全学を挙げて配慮したいものだ。
・計画や予算が不透明、政治的匂いも強い。
・学内にコンセンサスづくりの努力不足。
・事情が許せば環太平洋諸国との交流を早急に考えるべきである（本学学生の事情を最優先させるのは勿論のこと）。
・普通のルートでは入手困難な書物がより入手し易くなれば結構。
・教員職員の参加が必要。外国語による講座、日本語語学研修所。
・そろそろ本格的なアカデミックな国際交流の方向を目指したいものです。お祭り騒ぎやゴルフツアーはもうやめにしたい。

（順不同）

# SEMINARS

## 国際交流室主催：交換教授による教職員向け語学教室

1．韓国語会話クラス

講　師　任相一先生（韓国・大田大学校）
開催日　1989年10月12日より1990年8月1日まで毎週水曜日
時　間　17時10分～18時10分
場　所　本館2階小会議室
受講者　4名

2．韓国語会話クラス

講　師　具本璋先生（韓国・大田大学校）
開催日　9月19日より毎週水曜日
時　間　17時10分～18時10分
場　所　本館2階小会議室
受講者　5名

3．英語会話クラス

講　師　ペギー・オルソンさん（米国・モンタナ州立大学交換教授
グレゴリー・オルソン先生の奥様）
開催日　10月5日より毎週金曜日
時　間　17時10分～18時10分
場　所　本館2階小会議室
受講者　12名

## 海外事情研究所主催：講演会

1．テーマ　「アジアの地域展望と日本の役割」
講　師　リチャード・P・クローニン氏（米議会図書館議会調査局外交・国防部）
日　時　3月16日（金）13：00～15：00
場　所　本館3階特別会議室
参加者　20名

2．テーマ　「マレーシアにおける環境破壊の現状―日本の公害輸出の現状」
講　師　ミナークシ・ラーマン氏
（弁護士、マレーシア・ペナン消費者協会法律顧問）
日　時　6月8日（金）16：20～18：00

場　所　本館4階第一会議室
参加者　35名

**海外事情研究所主催：研究班例会**

1．テーマ　「アメリカとドイツ移民」
報告者　長野敏一熊本商科大学名誉教授
日　時　4月18日（水）13：30～15：00
場　所　本館3階特別会議室
参加者　13名

2．テーマ　「東欧の現状について」
報告者　小堀富夫氏（熊本放送代表取締役社長）
日　時　6月25日（月）16：20～18：00
場　所　本館3階特別会議室
参加者　15名

3．テーマ　「オセアニアで見た日本」
報告者　松岡泰輔氏（地域情報センター社長）
日　時　7月17日（火）16：20～18：00
場　所　本館3階特別会議室
参加者　18名

**海外事情研究所主催：研究会**

1．テーマ　「内側から見たペレストロイカ」
報告者　アレクセイ・イワノビッチ・ラズドルスキー氏
（モスクワ大学アジア・アフリカ研究所）
日　時　4月19日（木）15：00～16：30
場　所　本館3階特別会議室
参加者　33名

2．テーマ　「東西ドイツ統一と経済問題」
報告者　ハンス・マイャツェット氏（西独・ビベラフ大学教授）
日　時　9月21日（金）13：10～15：00
場　所　本館3階特別会議室
参加者　25名

**教養部主催：講演会**

1．テーマ　「内側から見たペレストロイカ―その現状と未来―」
　講　師　アレクセイ・イワノビッチ・ラズドルスキー氏
　　（モスクワ大学アジア・アフリカ研究所）
　日　時　4月19日（木）13：00～15：00
　場　所　721教室
　参加者　400名

**経済学部主催：講演会（国際経済学科開設記念講演会）**

1．テーマ　「『ＮＯと言える日本』～日米比較文化」
　講　師　カーク・スチュワード・マズデン氏（イリノイ大学）
　①国際経済学科1年生向け
　日　時　7月9日（月）　2：40～4：10
　参加者　180名
　②経済学科1年生向け
　日　時　7月10日（火）9：30～10：30
　場　所　431教室
　参加者　350名

**国際経済学科主催：講演会**

1．テーマ　「Land Risk and Return in the Land Market」
　講　師　朴 哲 洙 先生（アイオワ州立大学）
　日　時　10月11日（木）14：00～14：30
　場　所　721教室
　参加者　約200名

**熊本商科大学・熊本短期大学主催：講演会**

1．テーマ　「中国の教育と深圳大学」
　講　師　魏 佑 海 先生（深圳大学学長）
　日　時　11月21日（水）10：40～12：10
　場　所　427教室
　参加者　約200名

# 海外ゼミ研修

## （過去４年間の海外ゼミ研修一覧）

| 年　度 | 引率教員名 | 研　修　先 | 期　間 | 参加人員 |
|---|---|---|---|---|
| 1986年度 | 岩野茂道 | 韓国・大田大学 | 9／18～9／23 | 38名 |
| | 徳賀芳弘 | 韓国 | 11／18～11／20 | 31名 |
| | 中野いく子 | 韓国・大田大学 | 3／3～3／6 | 14名 |
| 1987年度 | 宮崎俊策 | 韓国 | 2／29～3／2 | 22名 |
| | 中野いく子 | 中国・深圳大学 | 3／14～3／17 | 13名 |
| 1988年度 | 岡本悳也 | 韓国・大田大学 | 4／11～4／15 | 24名 |
| | 勝部伸夫 | 中国・深圳大学 | 6／16～6／20 | 19名 |
| | 田島司郎 | 中国・深圳大学 | 9／15～9／19 | 13名 |
| | 田島司郎 | 中国・深圳経済特区 | 10／13～10／17 | 16名 |
| | 中野裕治 | 韓国・大田大学 | 11／21～11／24 | 18名 |
| | 中野いく子 | 韓国・大田大学 | 11／21～11／24 | 16名 |
| | 岡本悳也 | 中国・深圳大学 | 12／1～12／5 | 57名 |
| | 古田龍輔 | 中国・深圳大学 | 12／1～12／5 | |
| | 宮崎俊策 | 韓国 | 2／13～2／15 | 16名 |
| | 花谷　薫 | 米国・ハワイ | 2／18～2／23 | 33名 |
| 1989年度 | 勝部伸夫 | 韓国・大田大学校 | 12／22～11／25 | 20名 |
| | 田島司郎 | 中国・深圳大学 | 11／26～11／29 | 33名 |
| | 杉田憲道 | 中国・深圳大学 | 11／26～11／29 | 6名 |
| | 花谷　薫 | 米国・ハワイ | 12／6～12／11 | 15名 |
| | 岡本悳也 | クアラルンプール・シンガポール | 12／13～12／17 | 34名 |

# 1990年度　留学生名簿

## 正規生

| No. | 氏　　名 | 性　別 | 国　　籍 | 学部・学科・年・組 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 楊　津　京 | 男 | 中　国 | 商学部・商学科・1年3組 |
| 2 | 喬　軍　鋒 | 男 | 中　国 | 商学部・商学科・1年4組 |
| 3 | 白　学　澤 | 男 | 中　国 | 商学部・商学科・1年5組 |
| 4 | 韓　相　倫 | 男 | 韓　国 | 商学部・経営学科・1年1組 |
| 5 | 林　遠　玲 | 女 | 台　湾 | 商学部・経営学科・1年1組 |
| 6 | 崔　相　哲 | 男 | 韓　国 | 商学部・経営学科・1年1組 |
| 7 | 金　仁　萬 | 男 | 韓　国 | 商学部・経営学科・1年2組 |
| 8 | 周　淵　龍 | 男 | 台　湾 | 商学部・経営学科・1年3組 |
| 9 | 李　德　華 | 男 | 中　国 | 商学部・経営学科・1年4組 |
| 10 | 朱　毓　雷 | 男 | 中　国 | 経済学部・経済学科・1年1組 |
| 11 | 林　共　河 | 男 | 台　湾 | 短大・社会科・1年2組 |
| 12 | 劉　惠　瑛 | 女 | 台　湾 | 短大・教養科・1年1組 |
| 13 | 孫　永　紅 | 女 | 中　国 | 商学部・商学科・2年1組 |
| 14 | 劉　　沖 | 男 | 中　国 | 商学部・経営学科・2年1組 |
| 15 | 黄　啓　光 | 男 | 台　湾 | 商学部・経営学科・2年1組 |
| 16 | 孫　躍　東 | 男 | 中　国 | 商学部・経営学科・2年2組 |
| 17 | 林　倩　穂 | 女 | 台　湾 | 経済学部・経済学科・3年3組 |
| 18 | 張　琍　姫 | 女 | 中　国 | 商学部・商学科・4年4組 |
| 19 | 金　正　翰 | 男 | 韓　国 | 商学部・経営学科・4年1組 |
| 20 | 楊　国　華 | 男 | マレーシア | 商学部・経営学科・4年1組 |
| 21 | 周　佩　文 | 女 | 台　湾 | 商学部・経営学科・4年3組 |
| 22 | 陳　亮　宏 | 男 | 台　湾 | 経済学部・経済学科・4年2組 |

## 研究生

| No. | 氏　名 | 性別 | 国籍 | 学部・学科 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 劉　傑 | 女 | 中国 | 商学部・商学科 |
| 2 | 邢　晰 | 男 | 中国 | 商学部・商学科 |
| 3 | 畑ロザリンダ芳美 | 女 | メキシコ | 商学部・商学科 |
| 4 | 徐　成　華 | 男 | 中国 | 商学部・経営学科 |
| 5 | 袁　拾　金 | 男 | 中国 | 商学部・経営学科 |
| 6 | 孫　愛　紅 | 女 | 中国 | 商学部・経営学科 |
| 7 | 廖　柏　明 | 男 | 中国 | 商学部・経営学科 |
| 8 | 金　正　宇 | 男 | 中国 | 商学部・経営学科 |
| 9 | セバスチャン＝デービス | 男 | インド | 商学部・経営学科 |
| 10 | 森下ラウロ春樹 | 男 | ブラジル | 商学部・経営学科 |
| 11 | 蘇　愛　民 | 男 | 中国 | 商学部・経営学科 |
| 12 | 温　雪　垠 | 女 | 中国 | 商学部・経営学科 |
| 13 | 譚　先　富 | 男 | 中国 | 商学部・経営学科 |
| 14 | 楊　兆　利 | 男 | 中国 | 商学部・経営学科 |
| 15 | 金　善　九 | 男 | 韓国 | 経済学部・経済学科 |
| 16 | 崔　龍　吉 | 男 | 韓国 | 経済学部・経済学科 |
| 17 | 魏　玲 | 女 | 中国 | 教養科 |
| 18 | 陳　海　生 | 男 | 中国 | 教養科 |

## サンアントニオ市派遣留学生

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1 | ロバート＝テロ | 男 | 米国 | 経済学部・経済学科 |

## 大学院生

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 鄭　凱　希 | 男 | 中国 | 商学研究科・修士課程 |
| 2 | 黄　踽　鴻 | 男 | 中国 | 商学研究科・修士課程 |
| 3 | 呉　慶　煥 | 男 | 韓国 | 商学研究科・修士課程 |
| 4 | 劉　錦　銘 | 男 | 台湾 | 商学研究科・修士課程 |

## 交換留学生

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 廖　東　鳴 | 男 | 中国 | 経済学部・経済学科 |
| 2 | 劉　凱　東 | 男 | 中国 | 経済学部・経済学科 |

# １９９０年　国　際

| 月　日 | モンタナ | 大田 |
|---|---|---|
| １月22日 | | |
| 24日 | | |
| ２月５日 | | |
| ８日 | 春期短期派遣留学生（４名）出発 | |
| 23日 | | 渡辺晧先生（交換教授）出発 |
| 25日 | | |
| ３月10日 | モンタナ州立大学ティーツ学長来学<br>モンタナ州立大学ハウラー教授来学 | |
| 14日 | モンタナ州立大学ティーツ学長離熊 | |
| 15日 | モンタナ州立大学ハウラー教授離熊 | |
| 18日 | 柗永佳甫君（長期交換留学生）出発<br>橋本祐二君（長期交換留学生）帰国 | |
| 24日 | 春期短期派遣留学生（４名）帰国 | |
| 25日 | | |
| 28日 | | |
| ４月６日 | 田中利彦先生（交換教授）帰国 | |
| 14日 | | 経済同友会大田大学校訪問団出発 |
| 16日 | | 経済同友会大田大学校訪問団帰国 |
| 23日 | | |
| 26日 | | |
| ５月10日 | | |
| 12日 | | |
| | | 大田大学校親善訪問団来学 |
| 14日 | | 大田大学校親善訪問団離熊 |
| 23日 | | 朴殷穆先生（前交換教授）弔問団出発 |
| ６月２日 | | |
| ６日 | キャロル大生（短期交換留学生）１名来熊 | |
| 17日 | キャロル大生（短期交換留学生）１名来熊 | |
| ７月２日 | | 大田大学校学生研修団来学 |
| ６日 | | 大田大学校学生研修団帰国 |
| 12日 | キャロル大生（短期交換留学生）１名離熊 | |
| 21日 | クリフ・モンテイン先生（交換教授）帰国 | |
| 24日 | | 大田大学校教職員研修団来学 |
| 28日 | モンタナ州姉妹大学親善訪問団出発<br>モンタナ研修団出発 | |
| | | 大田大学校教職員研修団帰国 |
| ８月１日 | キャロル大生（短期交換留学生）１名離熊 | |
| ８月８日 | モンタナ州姉妹大学親善訪問団帰国 | |
| 20日 | | |
| 24日 | モンタナ研修団帰国 | |
| 27日 | | 任相一先生（交換教授）帰国 |
| 28日 | 明石喜嗣先生（交換教授）出発 | |
| 29日 | | 具本璋先生（交換教授）来熊 |
| ９月11日 | | |
| 14日 | グレゴリーＤ．オルソン先生（交換教授12月まで）来熊 | |
| 19日 | | |
| 10月６日 | | |
| 17日 | グレゴリーＨ．オルソン先生（交換教授１月より）来熊 | |
| 21日 | | |
| 25日 | | |
| 29日 | | 大田大学校10周年記念行事訪問団出発 |
| 31日 | | 大田大学校10周年記念行事訪問団帰国 |
| 11月15日 | モンタナ大学国際プログラムズ　ディレクター来学<br>マンスフィールドセンター所長来学 | |
| 20日 | | |
| 23日 | | |
| 27日 | | |
| 12月17日 | | |
| 21日 | | |
| 27日 | グレゴリーＤ．オルソン先生（交換教授）帰国 | |

# 交　流　EVENTS

| 深　圳 | その他 |
|---|---|
| 羅綱君・仰英姿さん（長期交換留学生）帰国 | |
| 王暁敏先生（交換教授）帰国 | |
| 伊藤幸太郎君・林田真奈美さん（長期交換留学生）帰国 | |
| 徳永盛久君・古堅育子さん（長期交換留学生）出発 | |
| 深圳大学訪問団出発 | |
| 深圳大学訪問団帰国 | |
| | 甲南イリノイ学生研修団来学 |
| | 甲南イリノイ学生研修団離熊 |
| | 韓国・啓明大学校学生研修団来学 |
| | 韓国・啓明大学校学生研修団離熊 |
| | 西独・ハイデルベルク市訪問団来学 |
| | 村上靖成君（熊本市派遣留学生）米国・アワーレディオブザレイク大学へ出発 |
| | ロバート・テロ君（米国・アワーレディオブザレイク大学派遣留学生）来学 |
| | 米国・インカーネットワード大学副学長来学 |
| | 中国・北京商学院訪問団来学 |
| 深圳大学代表団来能 | |
| 深圳大学代表団帰国 | |
| 杉田憲道先生（交換教授）出発 | |
| 劉凱東君、廖東鳴君（長期交換留学生）帰国 | |
| 深圳大学魏佑海学長来学 | |
| 深圳大学魏佑海学長離熊 | |
| | 中国・北京第二外国語学院訪問団来学 |
| 深圳大学研究調査訪問団来熊 | |
| 深圳大学研究調査訪問団離熊 | |

国際交流委員会メンバー

◎永末嘉孝・野尻秀之・北原明彦・岡本悳也
笹山　茂・西　紀昭・吉川勝正・柏野健三
原口行雄・星子三郎・西村禮二・喜佐田知子
（◎は委員長）

〒862　熊本市大江２丁目５番１号
熊本商科大学
熊本短期大学
ＴＥＬ(096)364－5161